

# モンテスキューの社會學的思想

不破祐俊

## 一、緒言

二、社會的並びに思想的背景

三、モンテスキューの生涯並びに著作

四、「法の精神」

## (イ) 目的

(ロ) 法の觀念

(ハ) 自然法と制定法と社會

(ニ) 自然環境と人類社會

Ⅰ 氣候と飲酒

Ⅱ 奴隸制と氣候

Ⅲ 女子の隸屬と氣候

Ⅳ 政治的奴隸制と氣候

Ⅴ 政體と氣候との關係に於ける宗教

Ⅵ 法と土地の性質

A 商業、B 人口

VII 自然環境論批評

五、結語

一 緒言

私はさきに James Lichtenberger の試みに従つて、本誌第八年第二冊所載の「ブラトンの社會學的思想」より出發して、第十一年第二冊所載の「社會契約論」まで年代を追ふて、社會理論發展の過程を見て來た。今やモンテスキューに就いて語るべきところとなつた。ここで私は今迄論述して來た社會理論發展の過程を振り返り、簡單に綜合的に再吟味をなし、それ等の傾向の幾つかを指摘することはモンテスキューの論述を進める上に於いて、多少好都合となるであらう。

私の論述の主題となし來れるものは社會學的取扱の發見である。如何にして人類社會の現象を説明するかを求むるにある。哲學的な思惟の興つてよりこの方、人類の集團生活の問題にもこの考へ方を以つて解釋せられてをつた。然し、この場合には、未だ體系づけられたと稱し得る程論理的分析にまで及ばず、斷片的であり、且つ社會進化の段階並びに知識の進歩程度に相應せる解釋であつた。

その始め、ブラトンにあつては、理想を描ける社會の雰圍氣の中にあつて理想主義の哲學を樹

立したのであつた。彼は社會秩序を人間が頭の中で組み立てた物と考へた。それは意識的功利的で、且つ、目的論的であつた。彼は人々は自分等の欲するところのものを認め、而して、社會はそのものを得んとする協同的手段の現れであると考へた。

これに反して、アリストテレスは、社會は然く簡單なものではない。社會成立の原因は本來功利の觀念にあらずして、社會性本能にあるとした。それ故に、彼の社會の説明は、人間が頭腦の中に描き出したにあらずして、人間の組織せんとする本能に求められるとしてゐる。従つて、社會は完成せる構成物にあらずして、寧ろ成長し來つたところのものである。

道德的革命と見做し得べきキリスト教の興起は社會紐帶としての「四海同胞」なる理論に對して新しき形式と意義とを與へたのであつた。キリスト教は社會の倫理的性質を強調したが、併、ヘブライ人の神權政治的觀念に支配され、ギリシヤ人に依つて信條化され、ローマ人に依つて制度化された爲、人類生活並びに社會に關して神學的解釋が加へられるに至つたのみならず更に強力なものとなつて、數世紀間、學究的研究の進捗を妨けたのである。

然しながら、この後起つて來た教會對國家に於ける鬭争は、社會理論をここに再び採り上げ、一步前進せしむるに與つて力があつた。而して、それはトーマスとダンテとの間に論争されたる社會統制の學說が論理と歴史とに依つて支持せられるところがあつたからである。神學及び

政治學の主張を正當ならしめんとして、再び理性に訴へられたのであつた。

マキヤヴェリーに至つては、教會と國家とに於いて、有力なる結合紐帶となつたものは學說よりも、強き個性であつたことを知つた。而して、彼は社會秩序の基礎として個性優越の理論を發展せしめたのであつた。

社會契約論者は、この過程の逆を行つて、個性を超越せる集團の、社會的優越を強調し、契約の基礎に於いてこの過程を確保し、正當なるものたらしめたのであつた。彼等は社會の制度或は組織をば上位の意志としてをつた過去の理論を破棄してしまつたのである。

以上の點を概括すれば次の如く云ふことが出来る。

1、社會解釋と云ふも、早くより一種の歴史哲學の形を採つてゐたけれども、それは今日云ふ嚴格なる意味の歴史哲學とは違つて、社會的政治的狀態の反影されたものであり、プラトン及びアリストテレス以來、その説明たるや斷片的であつたのである。それ故に、私が既述の論文に於いて、試みた如く、詳細に歴史的背景を述べるのは社會理論の出發點としてのみならず、同時代の歴史の解釋が、とりもなほさず、社會理論を構成するものであるとする見方から必要なことである。この點よりすれば、智的環境の方が重大にして、嚴密なる歴史的環境は左程重大ではないのである。

2、更に社會哲學は往々にして政治哲學の影に隠くされてしまつて、政治哲學の系論に過ぎざる觀を抱かせる。これは政治組織の著しき特質に一部は原因を持つてゐるであらう。社會過程はこの分野に於いては明瞭にして分化されてゐない。それにも拘はらず、我々は社會の非政治的方面に對して、社會分析のメスを多く向けてゐたことも知ることが出来る。社會解釋の原則は社會生活の全相を理解し、全社會組織の基礎である社會の因果關係の一般的の要素を包含してゐなければならぬことを知るのである。

3、この點に關して、當時の社會理論の哲學的特質は現代の科學的方法と對照して強調されなければならぬ。哲學的方法は前提を假定し、論理的結論を推理するにある。その前提なるものは觀察の結果であり、經驗の所産ではあるが、批判的檢討を缺いてゐるのは事實である。それ等は假想されたものである。科學の方法はこれと等しく、假説を組み立てる爲めに、或る程度の想像を用ふることは必要であるが、それと同時に、それ等の假説を事實なる鏡に照し、よりよき批判方法を以つてする過程を通らなければならない。アリストテレス及びボーダンの如き若干の例外を除いては、この時代迄のすべての學者の學説は主として哲學的なものであつた。而して、我々は彼等の學説の論理的なることに依つて、殆んど誤りないとさへ思はれ易い。乍然彼等の導いた結論及び學説の價值は直接に、彼等の前提の正確さに比例してのことであつて、これ

等の多くは歴史及び觀察のよりよき方法に照して見ては不健實と思はれるのである。

然るにも拘はらず社會哲學の批判的研究は純粹社會科學に對する緒論としては大なる價值がある。たとへ問題を解決せずとも問題を提出し、正確なる敘述をなすに至る方法を展開さす刺戟となつたのである。

モンテスキューに至つて、我々はこの研究方法に關しての轉換點に達したのであつた。哲學的假定よりなされたる論理的演繹は、社會の資料より歸納されたる調査に代はらんとするに至つた。然しながら、我々は過去の思辨的方法が完全に崩壞してしまふものとは豫想することは出来ない。何故なれば、根本的變化はかく速かに來るものではなく、除々に變化するものであることは明かである。我々はモンテスキューに依つてなされた近代記述科學の展開して行く過程に筆を進めなければならぬ<sup>1)</sup>。

## 二 社會的並びに思想的背景

同じ時代的環境でありながら、ルソーとモンテスキューとの考へ方が二つの全く異なる型を作つたものであることは先づ第一に注意されなければならない。しかも尙ほ、その時代は種々の思想の流れが二つの別々に相異なる方面へと赴かしめたと見られる。知識上の重大な變化

1) Cf. Lichtenberger, Development of Social Theory pp. 206-7.  
Cf. Small, General Sociology, Ch. IV.

が起りつゝあつた。これ等の變化の中、人の經驗を進化の過程に於いて歸納的に研究して説明する方法が過去の觀念的な或は思辨的な方法から分化し來つた。ルソーは啓蒙運動の所産ではあつたが、彼の社會契約説に於いては、社會哲學の既に崩壞してしまつた型を再び發見するのである。モンテスキューは新しき立場を採つて、たとへそれは完成されなかつたとは云へ、十分なる科學的性質を持つことに依つて、意味づけられてゐる。それ故に、彼の立場に新しい方向を與へた當代の思想の、特殊な點を先づ述べなければならぬ。

Galileo, Kepler 及び同系統の人々の勞作を通じての自然科學の發展は Newton に至つてその成果の極に達し、而して又、社會思想に甚だ大きい影響を與へ始めたのであつた。それは社會秩序に關して主觀的な思辨を見通してみても、その行き方に對して既に完全な懷疑説をとり來つて、却つて社會事實に關する興味を刺戟するに至つたのである。物理的現象を解釋説明した方法をつつて、社會現象を分析し解釋し得るであらうと云ふことが問題に上つて來たのである。文化の接觸と地理上の開發と發見とに依つて得られた新しい異教徒よりの材料は新しき興味を惹き起し、現存の社會制度へ批判の眼を向けしむるに至つた。啓蒙運動は國々に依つて種々異つた有様で現はれて來たとは云へ、それは一樣に社會學上に力強い影響を及ぼしつゝあつたのである。

自然宗教に基礎を有するイギリスの理論は性惡説の悲觀的な學説を打破し、未開より文明への人類の進歩を跡づける新しき倫理學説を建設するに力があつた。この論争が自由なイギリスに於いて、大部分はスコラ的に止まつてゐる間に、フランスに於いては中世的な制度を固く守ることに依つて、非開明論者の猛烈な力と共に帝王戰爭の形を採つて現はれた。ヴォルテールとモンテスキューの重なる武器は諷刺機智であつた。(モンテスキューの「ペルシャ人の手紙」を見よ)イギリスに於ける理想主義に反對して、フランスに於いては、唯物論が百科全書編纂者の仕事に依つて發達するところがあつた。それは人類がそれ迄に達し得た經驗的知識の集積に依つて、物理的世界と社會秩序とに關して科學的見地を構成することを求めたのであつた。かくして、それは比較法、歸納法に依つて社會現象の研究に一つの新しい基礎を供したのであつた<sup>2)</sup>。確かに環境の影響と云ふものはその時代思想を形づくるに當つて與つて力があるものである。中世に行はれてゐた商業政策よりも、現代の社會組織に大なる影響を及ぼすべく運命づけられたる産業革命の方が、既に政治的組織の範圍を越えて擴がり行く新しい社會問題の發生に有力なるものである。かくして、社會科學を分化せしむべき狀態を齎したのであつた。經濟上の關心は重農主義者やイギリスの古典經濟學者の方面に於いて特別の思考に依り求められたるものに一つの重要味を加へ、特殊社會科學形成への道中にあつた。同様にそれは分離した社

2) Cf. Rogers, A Student's History of Philosophy, pp. 386-99.



會秩序を再建する手段として——現今の意味に於ける社會學こそその起源をなしたのであるが——提出された數多くの計畫の現實性を批判すべく社會に關する綜合的組織的科學を作る必要に迫られた結果であつた。」<sup>3)</sup>

當時に於けるかゝる新しき思想に寄與をなした多くの學者の中に、特にモンテスキューに對して直接又は間接に彼を導いたと思はれる二人の學者がある。一人は Bodin であり、他は Giambattista Vico (1668-1744) で、Dunning に依ればヴィコこそモンテスキューに可成り重要な影響を與へてゐると見做してゐる<sup>4)</sup>。これは Flint が “The Philosophy of History” (1893) に於いて道破せる如く、モンテスキューがヴィコの諸著を讀んでこれから彼の歴史的方法が生み出されたものと考へられてゐるが、モンテスキューは何處にもそのことを記さず、隠してゐる跡が見えたとされてゐる。ヴィコは Francis Bacon や Hugo Grotius に依つて大いに影響され、又 Machiavelli 及び Bodin を屢々引照し、これ等と立場を同じうしてゐると云はれてゐる。彼は政治上の制度なり、觀念なりはそれ等の環境や、またそれ等の人民の國民性やに應じて變遷するといふ事實を、その著「新しき科學の原理」Principi di una Scienza Nuova 1725-30) の中に力説してゐる。この點モンテスキューと一脈相通する點がある。」<sup>5)</sup>

3) Barnes, Sociology Before Comte, American Journal of Sociology, Sept., 1917, p. 216.

4) Cf. Political Theories, Luther to Montesquieu, p. 389.

5) Cf. Gettel, History of Political Thought, p. 243.

## 三 モンテスキューの生涯並びに著作

モンテスキュー (Charles-Louis de Secondat, Brede Baron de la Brede et de Montesquieu) は一六八九年一月十八日 Bordeaux に程近き La Brede の城で生れた。この邸宅は十三世紀頃の建築で甚はだ古色味のある封建的、貴族的特点を帶びた城廓の如くであつた。代々貴族の家柄で彼の父は Jacques de Secondat と稱し、厳格な人物であり、彼の母 François de Penel は至つて敬虔な信者であつた。七歳にして母を失ひ、十一歳にして「Jury」のオラトリアル教會 (Oratoriens) の學校に入り、二十一歳の時まで在學し、熱心に歴史を研究し、一七一一年そこを卒業してから獨力で法律學を修めた。

一七一三年に父の死後は伯父たるボルドゥ市會議長 Baron de Montesquieu の保護の下に暮し、一七一四年にはボルドゥの市會議員の株を買つて、Conseiller au Parlement de Bordeaux となり、又、その翌年には伯父の勧めにより陸軍中將の娘 Jeanne de Latiqne と結婚し、十萬リーブルの持參金を得た。一七一六年、彼の伯父バロン・モンテスキューの死後、遺言に依り伯父の畛からぬ遺産と地位を繼ぐこととなり、彼は二十七歳にして一躍してボルドゥ第一流の金持ちであり、有力な人物と仰がれるに至つた。

然しながら、彼の家庭生活は満足のものではなかつた。それ故、彼の富、餘暇、社會的地位、學問的趣味を以つて華々しき社交界に出でて貴婦人達と交ることに依つて、彼の家庭的愛情の不滿を補はんとし、次第に當時の風潮に染まり、享樂的傾向が著しくなつて來た。彼の伯父の職たるボルドウ市會議長、終身官の公職を繼いだが、餘り職務には忠實ではなかつた。文學上の興味の方が遙かこれに勝つてゐた。

モンテスキューは一七一六年四月三日、ボルドウのAcademieに選ばれて入り、直ちに「宗教に於けるローマ人の政治を論ず」(Dissertation sur la Politique des Romains dans la Religion)を發表し、次いで自然科學の方面にも没頭し、解剖學、植物學、物理學等を研究し、腎臟の構造や、反響の原因や、物體透明の理等を發表したが、かゝる自然科學的研究は彼の興味を餘り長くつなぎ得ず、彼はやがて人文現象の觀察に興味を持つ様になつた。然し、この自然科學的研究こそは彼の社會學說に大きい影響を與へたことに於いて大なる意味がある。

一七二一年に「ベルシャヤ人の手紙」(Lettres Persanes)をアムステルダムに於いて匿名で出版した。これは皮肉に巧みな Rica 及び思慮に富む Usbek なる假想的ベルシャヤ人が、ルイ十四世紀の治世の終りにヨーロッパを見物し、故國の友人達に手紙を送つた形式で、當時のフランスの教會的、宗教的、腐敗と墮落とを諷刺したものである。モンテスキューの著なることは直ちに知れ渡

り、而も議長の公職にあるものが物したものととして一般に、感興を起させ、文壇に名聲を得るに至つた。こうなると彼はその公職を罷めることを決意し、彼の望みはバリーの、フランスのアカデミーに入ることに向けられたが、非居住者の故を以つて拒否されたので、一七二六年、自己の地位を賣つて、バリーに移り、フランスのアカデミーに入るを得た。<sup>6)</sup>

次いで、彼はドイツ、オーストリー、ハンガリー、イタリア、スウェーデン、オランダ、イギリス等に於ける旅行に數年を費して、社會生活、政治生活を觀察するところがあつた。彼はイギリスに約一年半（一七三〇—三一年頃まで）を過し、イギリス立憲政治の巧緻なることに深く印象づけられ、それが彼の理想となるまでに至つた。彼の言葉として傳へられる「ドイツは旅行する爲めに、イタリアは休息する爲めに、イギリスは考へる爲めに、フランスは住む爲めに造られたのだ<sup>7)</sup>とは、彼の遍歴後の感想を直截に示したものであらう。フランスに歸つてからの彼はバリーとブレードとに於いて研究に、著述に没頭したのであつた。

一七三四年、彼の最初の歴史的著作たる「ローマ人の偉大とその衰頹との原因に關する考察」(*Considerations sur les causes de la grandeur des Romains et de leur decendance*)が公にされた。これは彼の新しく考へた科學研究法を一つの特定の對象に適用せる例で、幾多の材料を集め、對象を一括し、年代順を追つて、ローマ興亡の推移に如何なる原因が因果的に相繼いで働いたかを明かにせん

6) Cf. *Persian Letters*, Introduction by Davidson, pp. 13-14.

7) *Ibid.*, p. 15.

とし、因果關係に依る論理的發展を敘述せんとしたものである。Edward Gibbon (1737-1794) は "History of the decline and fall of the Roman Empire, 6 vols, 1782-88." の中に於いてローマ帝國の衰微に就いて述べモンテスキューはその原因を説明してゐると云はれる。當時まで歴史の因素に關する彼の深き洞察力に勝れるものは一人もなかつたと云つて差支へない。「ベルシャ人の手紙」と同様、この書も匿名で出版されたが、その最初より著者に就いては何人も疑ふものはなく、熱狂的に受け入れられたと云つてもよい。これは近代の科學的歴史學の最初の著述と云はれるもので「イギリス文明史」(History of Civilization in England)の著者 Thomas Buckle はこの書に就いて次の如く云つてゐる。

「一七三四年、この注意すべき人物はローマの眞の歴史に關する知識を與へる最初の文獻と呼べるべき著述を公にした。それより十四年後に同一の著者に依る「法の精神」が現はれた。然しながら自分の見るところでは、さきものより偉大なものではない<sup>8)</sup>。」

又 Paul Janet は云ふ。

「モンテスキューの著書はマキャヴェリーの著書と比較することが出来る。この兩書はいづれもローマ史に關する一つの哲學である。然しながら、モンテスキューの著述はより多く歴史的であり、マキャヴェリーのそれはより多く政治的である。「リヴィオ論」(Discorsi sopra la prima decade di Tito Livio)は實際政治の綱要であり、

8) Thomas Buckle, History of Civilization in England, New York, 1880. Vol. I. p. 592.

「ローマの偉大と衰頹は歴史の一般法則の探究である。……………マキャヴェリーの政治學は全く經驗的であり、モンテスキューのそれはより多く科學的である<sup>9)</sup>。」

彼はこの後六年間この「ローマ人の偉大と衰頹との考察に取扱はれた歴史の一般的解釋を更に深く掘り下けつゝあつた。この仕事に彼は非常に傾注し、十四年後の一七四八年十一月に至り、その主著「法の精神」(De l'Esprit des Loix) 上下二巻が同じく匿名を以つてジュネーブで公刊された。

この書は三十一篇から成る大部のもので “De l'Esprit des Loix ou du rapport, que les lois doivent avoir avec la constitution de chaque gouvernement, le climat, la religion, le commerce etc ; a quoi l'auteur a ajouté des recherches nouvelles sur les lois romaines, touchant les successions, sur les lois françoises et sur les lois féodales. (法の精神、即ち法が各政體の構成、習俗、氣候、宗教、商業等々に對して持たねばならぬ關係に就いてローマ法、フランス法封建法に關する著者の新研究を附す)の如き長い表題を附せられたものである<sup>註</sup>。この書はモンテスキューの苦心の結晶で「ベルシャヤの手紙」の中に現はれた見解を發展させたものである。

彼がその著の序文の中に、その苦心の跡を次の如く語つてゐる。

「この著作を、余は幾度か始め、そして幾度か放棄した。余は書いた紙葉を幾千度となく風の弄ぶに任せた。余

9) Paul Janet, Histoire de la Science Politique dans ses rapports avec la morale 5e édition Tome II. p. 326.

田邊壽利、フランス社會學史研究、P. 102 參照。

は毎日父の手が落ちるのを感じた。余は何らの計畫を定めることなしに、余の目的を追及した。余は原則も例外も知らなかつた。余は眞理を發見する毎に、直ちにこれを見失つてしまつた。併し乍ら、一度び余の原理を發見するや、余の求めてゐたものはすべて現はれて來た。そして二十年の間に、余の著作が始まり、生長し、進捗し而して完成したのである。<sup>10)</sup>

Helvétius と Laurin とは、原稿を讀んで、この著作の大膽なる點がその著者の名聲に影響することを恐れて、彼に書を送つて、その公刊を思ひ止まるか或は少くとも訂正を加へることを忠告した。然しながら彼の忠言は顧みられなかつたが、それは却つてよき結果となつた。公刊後一年半にして二十二版を重ね歐洲諸國語に翻譯されるところがあつた。<sup>11)</sup>

又、一方この著に對する非難攻撃もすくなくなつたが、これ等の賞讃と非難の中にあつて、尚ほ幾多の小著を公にしたが、彼の努力はその體質を弱め、視力を害ひながらも、その研究の繼續を怠らなかつた。彼は一七五五年二月十日、年六十六歳にしてバリー滯在中に肺炎で死んだのであつた。<sup>12)</sup>

(註) 「法の精神」中よりの引用文は全部、宮澤俊義譯「法の精神」上下二卷(岩波文庫版)に據つた。明治九年一月に、この書は何禮之(中江兆民)に依つて「萬法精理」と題して英譯から重譯されたが完譯ではなく、同時に、鈴木唯一が「律例精義」と題して佛の原文から邦譯したが第一回だけで中絶してしまつた。昭和三年には木村幹が春秋社版世界大思想全集第五卷中に二十四篇までを翻譯してゐるが、その完譯は前掲宮澤譯に依つて昭和五年に公刊せられた。英譯中、參照し得たのは

10) 宮澤俊義譯、法の精神、(岩波文庫)上卷、29—30頁。

11) Cf. Condorcet, A Commentary and Review of Montesquieu's Spirit of Laws.

12) Cf. Memoir, by Prichard, in Spirit of Laws.

Montesquieu, Charles Louis, Baron de, *The Spirit of Laws*, translated by Nugent, New Edition ed. by Prichard, Geo. Bell & Sons, London, 1894. である。

#### 四 「法の精神」

##### (1) 目 的

モンテスキューが「法の精神」に論ぜんとしたことは何であつたか。彼が「法の精神」の序文の數節に於いて、この書の範圍並びに目的を説明してゐる。

「この本の中にある無數の事柄の中に、余の豫期に反して、讀者諸君の氣にさはるやうなことがあらうとも、少くとも、惡意を以て云はれたことは一つもない。余は生來決して惡口屋ではない。余はまづ人を研究した。そして、この無數の法と習俗の中に於て、人は決してその氣紛れのみによつて支配されてゐるのではないと信じた。」「余は原理を定立した。さうすると、すべての特殊の場合が自らそれに従ひ、あらゆる國民の歴史は何れもその續きにすぎなくなり、又、各々の特殊の法は他の法に結合し、又は他より一般的な法に依存してゐることが分つた。

「余は余の原理を、余の偏見からではなく、事物の性質から引き出した。

「少しでも事物を一定の擴がりに於て觀察する時は奇警者は、消滅してしまふ、奇警といふものは、通常、精神



が一方にのみ集中されて、すべての部分が捨てて顧られぬ場合にのみ生れるものだ。

「余は決していかなる國に於て設けられてゐるところのものをも批難する爲に書くのではない。いかなる國民もこの書に於て、その格率の理由を見出すだらう。

「もし余が、人をして、その偏見から免れさせることが出来たならば、余は余が最も幸福な人間なることを信するだらう。こゝに偏見と云ふは、人をして云々の事項を知らざらしめるところのものを指すのではなくて、人をして自己自らを知らざらしめるところのものを指すのだ。

「この著作が成功を得るならば、それは大部分はこの題目の莊大な爲だらう。が、余は余が全然才を缺いたとは信じない。フランスに於て、英國に於て、そして又獨逸に於て、あのやうに多くの偉い人たちが余以前に書いたのを見て、余は感嘆した。併し、余は決して勇氣を失ひはしなかつた。「俺だつて繪描きだ。」余はコレツジョと共にかう云つた。」<sup>13)</sup>

この序文中の句を以つてしても、モンテスキューは自己の解釋の獨創性、否むしろ、その爆彈的な點を意識してをり而も、自己の方法の正確なことを確信してゐる。彼は人智を一步進め得たと信じ、二十年間の眞面目な業績をその價值に基いて靜かに判斷して欲しいと願つてゐた。それ故に偏見を以つて見られたくなく、又「ベルシャ人の手紙」の著者として得た名聲から逃れたいとも願つてゐたであらうことは、如何に、彼が、この著述に自信を特つてゐたかが判る。又、第一篇

13) 「法の精神」序文(宮澤譯) 27—30頁。

の終りに要約してゐるところに依れば次の如く云はてれる。

「法は一般に、世界のすべての人民を支配する限りに於て、人間理性である。而して各國民の政法及び市民法はこの人間理性の適用される特殊の場合にすぎぬと云ふことでなくてはならぬ。

「それらの法は、その各人民にとつてあくまで固有なものでなくてはならぬ。従つて、一國民の法が他の國民に適合し得るならば、それは非常な偶然である。

「それらの法は、成立せる、若しくは、人の成立せしめんとする政體の性質及び原理に關聯せねばならぬ。政法の如くその政體を形成するものであらうとも、又は市民法の如くそれを維持するものであらうとも。

「それらの法は、國の地勢に、寒い、暑い、又は溫帶的氣候に關してゐなくてはならぬ。地味、その位置、大いさ、人民の生活の態様——農夫、獵人又は牧人等——に關係してゐなくてはならぬ。その憲法の認める自由の程度、住民の宗教、その性向、その富、その數、その商業、その習俗、その生活樣式に關係してゐなくてはならぬ終りに、それらの法は、それらの間に於ても關係を有つ。その起源、立法者の目的又、その基礎たる事物の秩序とも關係を有つ。まさにこれらすべての立場に於て、それらを考察せねばならぬのである。

「余が本書に於て爲さんとするところは、即ちこれである。余はこれらすべての關係を吟味しよう。これらの全體が、法の精神と呼ばれるところのものを形づくる。」<sup>14)</sup>

かゝる目的の下に作られた法の精神——これはモンテスキューが「ベルシャ人の手紙」ローマ

14) 「法の精神」(上) 38—39頁。

人の偉大と衰頹との考察を経て達した一生を通じての讀書と觀察との全成果であり、彼そのものの具現であるとも云へる——の如何なる點が社會學に貢獻をしたか。この書に表はれた社會學的思想の重要な點を以下に記すであらう。

#### (口) 法の觀念

社會學にとつて重要な貢獻をなしたのは、社會現象に於ける法則の確立であつた。それは先づ彼に於ける法の觀念を擧げることによつて知ることが出来る。

「法とは、最廣義に於て、事物の性質から生ずる必然的關係である。そしてこの意味に於て、すべての存在はその法を有つ。神もその法を有つ、物質界もその法を有つ、人間より上位の慧知的者もその法を有つ、獸類もその法を有つ、人間もその法を有つ。

「盲目的な運命がこの世に於て我々の見るすべての結果を産んだ、と云つた人たちは、きはめて莫迦なことを云つたものだ。なぜなら、一體、盲目的な運命が慧智的存在を産むと云ふ如き莫迦なことが有り得ようか。

「故に、まづ原始理性が存し、而して法とは、それと他の種々の存在との間に存する關係、及びこれらの種々の存在相互間の關係である。」<sup>15)</sup>

この定義に於いてモンテスキューは法の新しき概念を提示してゐる。我々がそれ迄に解釋し來つた二つの體系たる、法律は理性の命令であり或は主權者の一定の命令でありとする説と

15) 「法の精神」(上) 32頁。

根本的に背馳するものである。彼は法の概念を擴張して因果の一般的關係を含ましてゐる。彼の目的は專斷や氣まぐれな空想を排除し、原因結果の法則を打ち樹てることであつた。これ以外の何ものもなく、これ以外に基づく解釋にして適當なるものも、確實なものもあり得ない。科學的研究に對して、この考へ方の重要なことは如何に大きく評價されても過ぎたとは云はれない。「法の精神」は謂はばこの原理の論證であつた。

然しながら、彼がこの考へ方を實際に適用するに當つては屢々失敗してゐる。それは自らその研究法を科學的歸納法と考へながらも、實際に於いては可成り不正確な獨斷を敢えてしてゐて、主觀を離れることが出来なかつた點である。そのことは主に次ぎの三つの難點に依るとされる。第一に彼が研究しなければならなかつた科學的材料の不適當と不正確であつたこと、第二に、新しき研究法に對して著しく不熟れであつたことで、彼が推論して行くに當つて明かに荒削りであつたこと、第三に、彼が實際の政治家としての自分から、全く離れ切れなかつたこと等である。然しながら、彼が社會現象の解釋、研究に嚴正なる科學の精神、方法を以つて合理的に説明しようと心掛けたことは事實であつた。

この等の弱點は屢々非難を免れないところであつて、事實、彼の特殊研究の結論の多くを無効たらしめるものではあるが、全體として、彼の考へ方の重要性を減ずるものではない。これ等は

むしろ、將來の社會科學の進むべき道を示すものであらう。<sup>16)</sup>

#### (ハ) 自然法と制定法と社會

モンテスキューは以上の如く、その研究の態度に於いて甚はだ歸納的實證的であつたに拘はらず、自然の狀態に關する彼の說に於いては社會契約論者の影響を免れることが出来なかつた。彼は社會契約論者の如く、人間生存狀態を、共同生活を形成しない自然狀態と、契約に依つて國家を形成してゐる社會狀態とに分ける二分類を受け入れてゐるが、單に、各々の狀態に於ける法の性質に關せしめてゐるのである。

彼は人間の本性論に於いては Hobbes の “*bellum omnium contra omnes*” に反對し、Locke の說に賛して、社會成立の原因を説明し、その爲に先づ社會成立前の人間の考察から出發してゐる。社會成立以前の狀態はすなはち自然の狀態であるが、彼に於ける自然狀態とは歴史的に存在するものとして考へられた狀態ではない。それは論理的に假定されたに過ぎない。人間はその始めよりすでに社會的動物である。この點に於いて、彼は他の多くの點に於いて然るが如く、アリストテレスの忠實なる使徒であつた。<sup>17)</sup>

「自然狀態に於ける人間は、知識を有つより、むしろ知る能力を有つだらう。その最初の觀念が思辨的のそれでないことは云ふまでもない。彼は自己の存在の起源を探究する前に、自己を保存することを考へる。かうした人

16) Cf. Dunning, *Political Theories, Luther to Montesquieu*, pp. 394-8.

17) 田邊壽利、フランス社會學史研究、108 頁參照。

間は、はじめは、自分の弱さしか感じない。その臆病さは極端である。……

「この状態に於いて、各人は自己の劣位を感じる。そしてその平等を感じない。従つて互に攻撃し合はうとはしない。即ち平和が第一の自然法である。

「人間はその無力の感情に、その欲求の感情を結び付けるだらう。即ち、第二の自然法は、彼をかつて食を求めしむるところのものであらう。

「余は、恐怖の爲各人は互に逃げ合ふだらうと云つた。が、恐怖が相互的だといふ特色は、やがて彼らを相近付かしめるだらう。その上、彼らは、動物がその種の動物に接近する時感ずる歡喜によつて、接近する傾きを有つだらう。更に兩性がその相異に基き互に與へる魅力は、この歡喜を増大させるだらう。而して、彼らが常に互に爲す自然的願望が第三の法であるだらう。

「人間は、その最初に有つ感情の外に、尙次第に知識を有つやうになる。かく、彼らは他の動物の有たぬ第二の紐帶を有つ。従つて、彼らは互に結合すべき新な動機を有つ。而して社會生活をしようといふ欲望が第四の自然法である。」<sup>18)</sup>

平和を求め營養を得んとし、性的欲望を満さんとし、社會的生活をなさんとする。かゝる人間の本能こそ社會を形成したのであつたが、その社會はまた無力の感情を失つて、彼等の間に存した平等は消滅し、鬭争の状態を起さしめた。かくの如く、社會の出來た結果鬭争状態となつたと

18) 「法の精神」(上) 35—6頁。

する彼の考へ方は、ホッブスに於いては原因であつたものが彼に於いては結果と見られたので、正にホッブスの逆を行つたものである。

かゝる闘争状態を統制せんとして人間の間に制定法が發達したのである。而して、かゝる人間の意志の合致が國家を生むに至つたが、モンテスキューは、この社會契約の性質に就いては論ぜず、その制定法の性質を決定する條件を説かんとするのでこれが「法の精神」に於ける研究である。この制定の法には、各社會間の法たる「萬民法」(droit des gens) 一つの社會の構成員として、治者と被治者との關係を規定する「政法」(droit politique) 同じく構成員相互の關係を規定する「市民法」(droit civil) との三つがある。

自然状態は未だ經濟現象の發生を見ず、ただ自然法の存在を見るのみであつて、未だ制定法の存在を見ない。而して、この自然状態は必然的に社會状態へと進展するものと考へられて居り、社會状態は又同時に闘争状態であるから、そこには制定法が必要とされ、就中、政法が必要とされ、社會は政治組織なくしては存立し得ぬ<sup>19)</sup>のである。従つて、政法と諸種の政體との關係が説かれるのである。

「政體には三種ある。共和政 (Républicain) 君主政 (Monarchique) 專制政 (Despotique)……余は三つの定義と云ふよりもむしろ三つの事實を豫想する。即ち共和政體は人民が全體として、又はその一部分のみが主權を有

19) 「法の精神」(上) 37 頁。

つ政體であり、君主政體は一人が固定的に定立された法によつて統治する政體である。反之、專制政體に於ては一人が、法なく規律なく、すべてをその意志と氣紛れによつて行ふ、と云ふこと。

「共和政に於て、人民が全體として主權を有つ時、それは民主政 (Democratic) である。主權が人民の一部の手にある時、それは貴族政 (Aristocratic) と呼ばれる。」<sup>20)</sup>

これは、Durkheim の指摘せる如く、社會が政體として表示され、この政體の分類は、とりもなほさず社會形態の分類である。

然るに、モンテスキューは第十八篇「法と土地の性質との關係に就て」の所で制定法を持たず、むしろ慣習に依る非確定的な政治狀態の社會を述べてゐる。

「野蠻人民 (Savage) と未開人民 (barbare) との間には次の如き相異がある。即ち、前者は、ある特別の理由にもとづき相團結し得ざる散在せる小國民であるが、後者は、通常相團結し得る小國民である。前者は通常狩獵民であり、後者は通常牧畜人民である。このことはアジアの北部に於て著しく表れてゐる。シベリヤの諸人民は一團となつて生活し得ぬ。なぜなら、彼らは食へないであらうから。がタルタル人は暫くの間は、一團となつて生活し得る。なぜなら、彼らの家畜は、暫くの間、之を集合し得るから。従つてすべての遊牧團が相聯合し得る。而して、これはある首領が他の多くのそれを服従せしめた時に起る。その後、これらの諸團は、相分離するか、又はどれかの南方の帝國に大征服を試みるか、その何れかの途を擇ばねばならぬ。」<sup>21)</sup>

20) 「法の精神」(上) 41 頁。

21) 「法の精神」(上) 389—290 頁。



ここに、我々は、Hordéの如きものの結合と分化との過程を見得るのであつて、更に、かゝる社會の慣習並びに家族關係にも觸れて次の如く説いてゐる。

「これらの人民の制度は、法より、むしろ習俗と呼ぶことが出来る。

「さうした國民に於ては、過去の事柄を記憶してゐる老人が大きな權威を有つ。そこでは人は財産によつて顯別されず、腕と意見によつて顯別される。

「これらの人民は牧場又は森林に流浪し、分散する。結婚は我らの間——そこでは結婚は住所によつて確定され女子は家に屬する——に於ける如く保障されてゐない。従つて人民はより容易に妻を變へ、それを多數有ち、そして時には獸類の様に無差別に相交ることが出来る。

「牧畜人民は、その生活手段たる家畜と離れることは出来ない。彼らは又、その家畜の世話をするその妻と離れることは出来ない。従つてこれらはすべて一所に動かねばならぬ。その上、彼らが通常要害の地の少い大平原に生活する結果として彼らの妻、子、家畜はその敵の餌食となる恐れがあるから、なほさら然りだ。」<sup>22)</sup>

モンテスキューが法と社會との關係に就いて語つてゐる政體論の部分は第二篇より第十三篇に亘り、この中には眞に社會的取扱ひが隨處に表れてはゐるが、この全體に就いてこれ以上詳細に考察するは、今我々にとつては必要ではない。我々がここに力説せんとするところのものは第十四篇より社會生活が自然環境に依つて影響せられ社會理想並びに社會制度の上に如

何に表はれるかに關する彼の所説で、この點こそ社會科學に對する大きい貢獻であり、彼が社會學說史上に於ける重大な地位を占めてゐるところである。

### (三) 自然的環境と人類社會

モンテスキューはボーダンと違つて環境の社會に對する影響の事實を觀察したのみならず、その影響の現はれる過程をも説明してゐる。

「法の精神」第十四篇第一章に於いて

「精神の性質と心の情感は種々の氣候に於て著しく異ると云ふことが眞であるならば、法はこれらの情感の相異並びにこれら性質の相異に照應せねばならぬ。」<sup>23)</sup>

と云ふ一般的觀念から出發して詳細に自然環境の影響を説明する。

「冷い空氣は我らの身體の外部的纖維の尖端を引き締める。これはその彈性を増し、尖端の血の心臟に向つて歸ることに助力を與へる。それは又それらの纖維の長さを縮める。従つてその爲にさらにその力を増さしめる。反之善い空氣は纖維の尖端を弛め、それを長くする。従つてそれは力とその彈性を減ずる。

「従つて人は寒い氣候に於て、より多くの元氣を有つ。心臟の活動と纖維の尖端の反作用とはよりよく行はれ、體液はよりよき均衡を保ち、血液はより心臟に向つて進められ、而して反對に心臟はより強き力を有つ。このより大なる力は必ず多くの結果を産む。たとへば、自己に對するより多くの信頼、即ち勇氣が増す。自己の優越を

23) 「法の精神」(上) 316 頁。

よりよく知る。即ち復仇の欲望が減る。自己の安全につきよりよき意見を有つ。即ち、より率直となり、猜疑、  
術策及び詭計が減る。要するに、それは必ず性質を一變させる。が、人を暑き閉鎖された場所におくならば、彼  
は、前述の理由により、きはめて著しき氣力の衰弱を蒙るであらう。もし、かゝる情況に於て彼に勇敢な行動を  
すゝめるならば、彼は甚たいやがるだらうと思ふ。彼の現在の無氣力が彼の心に意氣銷沈をもたらずであらう。

彼はすべてを怖れるであらう。なぜなら、彼は自己が何ものをも爲し得ぬことを知るであらうから。暑い國の人  
民は老人のやうに怯懦だ。寒い國の者は青年のやうに勇敢だ。<sup>24)</sup>

かくの如く、氣候の寒暑が人間の肉體に與へる生理的、心理的影響を論じ、かゝる觀察は更に、筋  
肉並びに神經の反作用の生理學的分析イギリス及びイタリーに於ける同一歌劇が二つの國民  
の上に與へる異つた影響、羊を使用して、その生理作用を檢微鏡的實驗をする等に依つて補足さ  
れてゐる。<sup>25)</sup>

この考へ方が、社會慣習、社會制定の説明に光を與へたと見られる。以下種々なる例を舉げる  
であらう。

### I、氣候と飲酒

「暑い邦では、血液の水分は發汗によつて著しく發散する。従つて同様の液體を以て之に代へねばならぬ。水は  
そこで非常に役に立つ。強い酒は、水分發散の後に殘存する血球を凝結させるであらう。

24) 「法の精神」(上) 316—17 頁。

25) 「法の精神」(上) 317—18 頁參照。

「寒い邦では、血液の水分が、發汗によつて發散すること少い。それは常に多量に存する。従つてそこでは酒精飲料を用ひても、血が凝結することはない。人は體液に満ちてゐる。血は運動を與へる強い酒も、そこでは適當であり得る。」

「故に、酒を飲むことを禁ずるマホメットの法は、アラビヤの氣候の法だ。従つて、マホメット以前に於ても、水がアラビヤ人の共通の飲料であつたのだ。カルタゴ人に飲酒を禁じた法も又氣候の法であつた。……」

「寒い邦では氣候が國民的飲酒性——個人のそれとは全く異なる——を強制するやうに見えるから、さうした法は良くない。飲酒性は、至るところ、寒さと濕氣とに比例して、成立する。赤道から北極まで進むならば飲酒性が緯度と共に増大するのを見るであらう。同じ赤道から反對の極に進むならば、そこでは飲酒性が南に向つて進む——こちら側では北進するやうに——のを見出すであらう。<sup>[26]</sup>

この結びとして

「種々の異なる生活様式を形成したものは、種々の氣候の下に於ける種々の欲求であり、而して、この種々の生活様式が各種の法を形成した<sup>27)</sup>。」

## II、奴隸制と氣候

「固有の意義に於ける奴隸制とは、ある人に、他人の生命及び財産の絶對支配者たる權力を有たせる權利の確立

26) 「法の精神」(上) 324 頁。

27) 「法の精神」(上) 325 頁。

である。それはその性質上良くない。それは主人にとつても奴隷にとつても、有益でない。

「奴隸制を樹立したものが憐愍であり、これはそれが爲に三つの方法をとつた、とは人は決して信じないであらう。

「萬民法は、捕虜は、人が之を殺さぬ爲に、奴隸とすべしと定めた。ローマ人の市民法は、その債權者によつて虐待される恐ある債務者に、その身を賣ることを許した。而して自然法は、奴隸たる父がもはや養ひ得ざる幼兒は、その父の如く奴隸たるべしと定めた。

「この法律家の議論は合理的でない。(一)戦争で人を殺してもいゝと云ふのは間違ひだ。もつとも緊急的必要の場合には例外だ。……戦争が與へ得る捕虜に對するすべての權利は、捕虜がもはや害を爲し得ぬやうにその身體を取押へることだ、……(二)自由人がその身を賣り得ると云ふのは眞ではない。……各市民の自由は、公の自由の一部だ。この資格は民衆的國家に於ては、さらに主權の一部でもある。その市民たる資格を賣るのは、人間に於て想像し得ざる程の無法な行爲だ。

「第三の方法〔奴隸を基礎づけるべき〕は出生である。が、これも他の二者と同じく誤つてゐる。なぜなら、人がその身を賣り得なかつたとするならば、なほさら彼は、生れざるその息子を賣ることは出来なかつた筈だ。戦争の捕虜を奴隷とすることが出来ぬならば、その子を奴隷とすることは、尙更許されぬことだ。」<sup>28)</sup>

かくの如く、モンテスキューはローマ法學者の奴隸制の權利の起源に關する説に反對し、社會

28) 「法の精神」(上) 335—36 頁。

慣習宗教、人種の相違から來るとする。

「余は又、奴隸制の權利は、一國民が他國民に對して有つところの、慣習の相違にもとづく輕蔑心から生ずると云ひたい。

「ロベス・ド・ゴマラ (Lopes de Gomara) 曰く、「西班牙人は、サント・マルトの近くで、土民たちが食料品を入れた籠を見出した。食料品と云ふのは、蝦や蝸牛や蟬や蝨であつた。征服者は、被征服者に對して、これを犯罪とした。」  
「余は又同じやうに、宗教は、その宣傳をより容易ならしめる爲に、それを信奉する者に對して、之を信奉せざる者を奴隸とする權利を與へる、と云ひ度い。……」

「ルイ十三世は、その殖民地の黑人を奴隸とする法について甚だしく心を痛めた。が、これが彼らを改宗させる一ばん確實な途だといふことを十分説明された時、彼はこれに承諾した。

「もし余が、黑人を奴隸とする我らの權利を辯護すべきならば、余は次の如く云はう。

「歐洲の人民はアメリカの人民を根絶した故、あのやうな廣い土地を開墾するに使用すべく、アフリカの人民を奴隸とせねばならなかつた。

「もし砂糖を産する植物を奴隸によつて栽培させなければ、砂糖は餘りに高價になるだらう。

「今問題にする人たちは、足の先から頭まで黒い。而して、彼らの鼻は、彼らに同情することを殆んど不可能ならしめるほど、壓し潰されてゐる。

「きはめて賢明なる神が、魂とりわけ良き魂を眞黒な身體の中に置いたとは考へ得られぬ。

「人類の本質を形成する者は色だ、と考へるのは、きはめて自然であるから、宦官を作るアジャの人民は、常に黒人から、その吾らとの類似を、常にますます著しき方法で、奪ふ。

「皮膚の色は、髪の色によつて判斷し得る。髪の色は、世界最良の哲學者たる埃及人の間に於ては、非常に重大な意義を有し、彼らはその手中に來る赤髪の人間はすべてこれを殺したほどだ。

「黒人が常識を有たぬことの一體は、彼らが金の頸飾——文明國民の間では、しかく貴重がられる——よりも、硝子の頸飾をより重んずることだ。

「我らが、これらの人たちを以て人間だと想像することは不可能だ。なぜなら、もし彼らを人間だと想像するならば、我ら自身は基督教徒でない、と信ぜられるに至るであらうから。

「小人たちは、アフリカ人に對して爲される不正を餘りに誇張しすぎる。と云ふのは、もしそれが彼らの云ふが如くならば、互にしかく多くの無用の協定を爲すところの歐洲諸君主が、仁慈と憐愍とのために一の一般的協定を爲す氣にならぬことがあらうか。」<sup>29)</sup>

而して、この最後のバラグラフに次の如き語を施してゐる。「以上の黒人に對するおどろくべき偏見は、當時の自由思想家たちの眞の性質の一端を示すものとして興味があらう。」

ここに於いてモンテスキューは偉大な皮肉を以つて奴隸制の非なることを論じた。その論

じ方が眞向から振りかざして反對論を進めてゐるのでない爲め、やゝもすれば奴隸制一般を是認してゐるを思はしめるのである。以下、屢々我々は同様な場合に遇ふのである。

更に、奴隸制の權利の眞の起源に就いて論を進めてゐる。

「今や奴隸制の權利の眞の起源を求むべき時が來た。それは事物の性質の上に基礎づけられてゐなければならぬさうした場合ありや否やを考究しよう。

それには二つの起源が濫々ながら挙げられてゐる。先づ第一が専制政體の下に於けるそれである。

「すべての専制政體に於ては、人はきはめて容易にその身を賣る。ここでは政治的奴隸制が、いはば、市民的自由を消滅させてゐる。……ロシア人は頗る造作なくその身を賣る。余はその理由をよく知つてゐる。それはその自由が何ら價值がないからだ。

「これは、或る邦々に於て見出される。きはめて温和な奴隸制の、權利の正當なる、而して理性にかなつた起源である。而して、それは必ず溫和でなくてはならぬ。なぜなら、それは、人が、その利益の爲に、その主人に關して爲す自由なる選擇——このことは、兩當事者間の相互的合意を形づくる——の基礎の上に立つのであるから。」  
第二は自然的に發生した奴隸制である。

「こゝに、奴隸制し、かも人の間に見られるかの苛酷な奴隸制の權利の他の起源がある。



「暑さが身體を弱らせ、あまり勇氣を失はせるから、人は刑罰の恐怖によるに非ざれば苦しい義務に従はぬといふやうな邦々がある。従つて、ここでは、奴隸制は理性に反すること比較的少い。そして、ここでは、主人も、その奴隸が彼に對して然る如く、その君主に對して怠慢であるから、市民的奴隸制はさらに政治的奴隸制を伴ふ。」<sup>30)</sup> アリストテレスは自然的奴隸の存在を證明しようとして毫もそれを證明してゐない。モンテスキューはこの點を説明し得たと信じてゐる。彼の考に依れば若し奴隸制が全く是認せられるとしても、それは環境から來たとする理由に於いてであらう。奴隸制がたとえ時として、有益と思はれる如き状態にあつたとしても、不自然たるを免れないのである。

「すべての人は生れ乍ら平等だから、奴隸制は自然に反すると云はねばならぬ。たとへ、ある地方に於ては、それが自然的理性の基礎の上に立つとも。」<sup>31)</sup>

従つて奴隸制の可否に關して彼の結論と見るべきものは次の言葉である。

「余をしてこの項を書かしむるものは、頭であるか、又は胸であるか、余は知らぬ。世界に於て自由人を勞働に従事させ得ぬやうな氣候は恐らく有るまい。法が悪く作られてあつたから、人が怠惰になつたのであり、これらの人が怠惰であつたから、奴隸制の下に置かれたのである。」<sup>32)</sup>

モンテスキューはこの奴隸の實際上の問題を取扱ひ、並びにそれを排斥非難する方法に至つてはボーダンと殆んど軌を一にしてゐると云つてよく、本質的には何等の新し味は見られない

30) 「法の精神」(上) 339—40 頁。

31) 「法の精神」(上) 340 頁。

32) 「法の精神」(上) 342 頁。

のである。

### III、女子の隷屬と氣候

次ぎに、モンテスキューは氣候と婚姻の諸形式との關係を法の精神第十六篇に於いて論ずる。「暑い氣候では、女子は八歳、九歳及び十歳にして婚姻適齡となる。従つて、そこでは幼年時代と結婚とは殆んど常に行きする。彼女らは二十歳で老いる。従つて彼女らに於ては、理性が美と共に存することはない。美が支配權を要求する時、理性はこれを拒絶せしめる。理性がそれを獲得し得べき時、美はもはやない。従つて女子は常に從屬的地位にあらねばならぬ。なぜなら、彼女らの若い時に於てすら美が彼女らに與へざりし支配權を、理性がその老年時代に於て獲得してくれることは出来ぬから。従つて、男は、宗教がそれに反對せざる限り、その妻を捨て、他の女子をとり、多妻制が発生するのは、きはめて當然である。

「女子の魅力がよりよく維持され、女子の婚姻適齡がよりおそくかつ、女子がより長じてから子を産む溫帶地方に於ては、その夫の老衰はいはば、彼女らのそれに伴ふ。而して、彼女らは結婚する時、より多くの理性と知識を有つてゐる。——單により長く生きたからのみにもせよ——から、當然に兩性間に一種の平等が生じ、従つて一婦制が生ずべきであつたのだ。」<sup>33)</sup>

「故に一人の妻しか認めぬ法は、アジアの氣候よりも、歐洲の氣候により關係する。これが、回教がアジアではあのやうに容易に確立され、歐洲では擴まるにあのやうに困難を感じたこと、又、基督教が歐洲で維持されて、

33) 「法の精神」(上) 356—7 頁。

アジアでは亡びたこと、さらに終りに、支那で回教徒があつたやうに發展し、基督教があつたやうに發展しなかつたこと、の理由の一つだ。」<sup>34)</sup>

更に、男女出生率も大いに氣候と關係を持つものである。

「歐洲の諸所で爲された計算によれば、歐洲では女子よりも男子の方が多く生れる。反之、アジア及びアフリカの報告は、そこでは男子より女子の方が多く生れると云つてゐる。従つて、歐洲の一妻制を定むる法及びアジア及びアフリカの多妻を認むる法は氣候に對して一定の關係を有つ。

「アジアの寒い地方では、歐洲に於ける如く、女子よりも多數の男子が生れる。喇嘛僧は云ふ。これが、彼らの間に於て、一人の女が數多の夫を有つことを許す法の理由である。」<sup>35)</sup>

彼はかくの如く説明はしてゐるが、かゝる慣行を是認してゐるのではなく、従つて、多妻制の法又は多夫制の法を制定する程の、男女間は大きな不均衡の國がさう多いとは認めず、ただ、その理由づけをしてゐるに過ぎないのである。

かくて、婚姻の諸形式を決定するに當つての環境の影響を説明し、その結果生じた制定の説明と、それを是認することの關係を明かにした後、その何等功用を齎らざることを述べ、政體との關係を指摘し、如何にして市民法が理想との一致を得んが爲めに組織せられたかを示してゐるのである。

34) 「法の精神」(上) 357頁。

35) 「法の精神」(上) 358頁。

「多妻制を、一般的に、それを多少認容し得るものたらしむべき諸種の事情から獨立に、觀察するならば、それは人類にとつても、又は兩性の何れにとつても、——それを濫用する者にとつても、濫用される者にとつても、

——毫も爲にならぬ。それは又子供にとつても爲にならぬ。」<sup>36)</sup>

「共和政に於ては、市民の地位は限定され、平等であり、溫和であり、制限されてゐる。そこではすべてが政治的自由を表はしてゐる。女子に對する支配は、そこでは、しかし十分に爲され得ぬ。そして、氣候がこの支配を必要とする時は、一人統治の政體が最も適當であつた。東方に於て民衆的國家の樹立が常に困難であつた理由の一つはこれだ。

「反之、女子隸屬制は、すべての濫用を好む專制政體の精髓にきはめて適合してゐる。従つて、アジャに於てはいつも家内隸屬制と專制政體とが歩を共にして進んだ。」<sup>37)</sup>

「多妻制の場合に於ては、家族が統一を缺けば缺くほど、法はこれらの分離した部分を一の中心に統一せねばならぬ。利益が種々相違すればするほど、法がそれを一の共通な利益に引き戻すのが、より適當となる。」<sup>38)</sup>

「であるから、ある氣候の物理的勢力〔自然力〕が兩性の自然法並びに慧智的存在のそれを破る時は、立法者はまさに氣候の性質に對抗して、根元的な法を恢復すべき市民法を作るべきだ。」<sup>39)</sup>

#### IV、政治的奴隸制と氣候

「法の精神」第十七篇は政治的奴隸制と氣候との關係を論じて、これも氣候の性質に依存してゐる

36) 「法の精神」(上) 359—360 頁。

37) 「法の精神」(上) 362 頁。

38) 「法の精神」(上) 363 頁。

39) 「法の精神」(上) 365 頁。

ることを説く。

「強い暑さは人の力と勇氣を弱めるが、寒い氣候では一定の肉體的及び精神的力があつて、長く、苦しく、大いなる、而して大膽な行爲を爲す能力を人に與へることは既に述べた。このことは國民と國民との間について云はれるのみならず、さらに同じ邦に於ても、その一部と他の部分との間についても云はれる。支那の北部の人民は南部のそれより勇敢であるし、朝鮮の南部の人民は、北部のそれほど勇敢ではない。

「従つて、暑い氣候の人民は怯懦なる爲殆んど常に奴隸となり、寒い氣候の人民は勇敢なる爲その自由を維持し得たことは、怪しむに足らぬ。これはその自然的原因から生ずる一結果だ。<sup>40)</sup>

「これらの事實を前提として余は斯く論ずる。即ち、アジャは固有の意義に於ける溫帶を有たぬ。きはめて寒い氣候にある場所が、直ちに、きはめて暑い氣候の下にある場所、即ち、トルコ、波斯、モブル、支那、朝鮮及び日本に接する。

「反之、歐洲では、溫帶がきはめて廣い。それは種々の甚だ相異なる氣候の下に位し、西班牙及び伊太利の氣候と諾威及び瑞典のそれとの間には何らの類似も無いのではあるが。併し、そこでは氣候は、南から北に進むにつれ殆んど各地方の緯度に比例して、少しづゝ寒くなるから、各地方は殆んどその隣の地方と同様であり、その間に著しき相違はなく、余の今述べた如く、溫帶がきはめて廣い、と云ふ結果になるのだ。

「以上から次の結論が生ずる。アジャでは強い國民と弱い國民とが對峙し、好戰的な、勇敢な、而して活動的な

40) 「法の精神」(上) 374 頁。

人民が、直ちに、柔弱な、怠惰な、怯懦な人民に隣接する。従つて、一は征服され、他が征服者とならねばぬ。歐洲では、反之、強い國民と強い國民とが對峙してゐる。相隣接する國民は殆んど同じ位の勇氣を有する。これが、アジアの無力及び歐洲の強力、歐洲の自由及びアジアの隸屬制の大きな理由だ。この原因は、余の知るところでは、未だ何人も指摘したことがない。アジアでは自由が増加することが決して無いのに反して、歐洲ではそれは事情に従つて増加したり、減少したりするのは、この理由にもとづく。<sup>41)</sup>

モンテスキューは國に就いての一般法則に對しては一つの重大な除外例を示してゐる。それは、ロシアの貴族が、その君主の一人に依つて隸屬狀態に陥られたことであるが、それも、南方の氣候によつては決して與へられぬ短氣の特色が見えるのである。更に、北方の一王國たるデンマークではその法を失つたが、これも氣候の影響から考ふるならば、その喪失は恢復出來ないことではないとして、彼は矢張り氣候の影響を重視してゐるのである。

#### V、政體と氣候との關係に於ける宗教

「法の精神」第二十四篇第五章に、この問題を取扱つてゐる。

「宗教がある國で生れ、形成される時、それは通常その國の政體形式に従ふ、なぜなら、それを受ける人、及びそれを受けさせる人は、その生れた國の施設以外を考へぬから。

「二世紀前、基督教が不幸にもカトリックとプロテスタントに分割されるや、北方人民はプロテスタントを採

41) 「法の精神」(上) 376—7 頁。

り、南方人民はカトリックを保持した。

「これは、北方人民は南方人民の有たぬ獨立と自由の精神を有ち、常に有つであらうし、而して、眼に見える首長をもたぬ宗教は、首長をもつ宗教よりも、氣候(風土)の獨立心に適合するからだ。

「プロテスタントが確立された國に於ても、革命は政治的狀態のプランに基づいて爲された。有力な君公を味方にしたルッテルは、何らの外部的優越を有たぬ教會的權威を彼らに味はせることは出来なかつたであらう。が、共和政に生活せる人民や君主政に於ける無知な町人を味方にしカルヴィンは、優越や榮典を設けずに十分すんだ。「この二宗教の各々は自ら最も完全だと信ずることが出来た。カルヴィン派は自ら基督の云つたことより適合すると考へ、而してルッテル派は自ら使徒たちの爲したことにより適合すると考へつゝ。」<sup>42)</sup>

## VI、法と土地の性質

氣候のみならず、土地の性質も文化と一定の關係を持つものであるが、ここでは商業並び人口に對する關係に限局して考へる。

「國土の良質なることはそこに自然に従屬性を成立せしめる。そこで人民の主要部分を爲す農民は、その自由をあまり惜しがらぬ。彼らは餘りに急がしく、餘りに彼ら自身の仕事に追はれてゐる。富に満てる農村は掠奪を怖れ、軍隊を怖れる。……」

「故に一人統治の政體は豐沃の地方によりしばしば見出される。このことは、時に、土地の不毛なことの埋め合

せだ。」<sup>43)</sup>

「法は、各種の人民がその生計を立てる方法と、大いなる關係がある。商業及び航海に従ふ人民にとつては、その土地を耕作するを以て満足する人民にとつてより、廣汎な法典が必要だ。後者にとつては、牧畜によつて生活する人民にとつてより、廣汎な法典が必要だ。この最後の者にとつては、その狩獵によつて生活する人民にとつてより、廣汎な法典が必要だ。」<sup>44)</sup>

これ等の職業を決めることは、その國の性質に依るのであるからして、その國の性質が、究極には、法の性質を決めることになる。従つて、モンテスキューは、この原理で以つて、種々なる人民の間に行はれてゐるところの、雜多なる行動型とか、相異なれる儀禮とか、慣習とか、諸種の社會制度とかを説明してゐるのである。

#### A. 商業

商業と自然環境との關係に就いては、法の精神第二十一篇に於いて、商業は大きな革命を蒙るものであるが、一定の自然的原因即ち土地の性質又は氣候の性質がその性質を永久的に決定すると云ふことがあり得ると説いてゐる。

「ヨオロッパに於ては南方の國民と北方の國民との間に一種の均衡が存在する。前者は生活のためのあらゆる種類の便宜を有し、而してあまり多くの欲求を有たぬ。後者は多くの欲求を有ち、而して生活のための便宜を餘り

43) 「法の精神」(上) 383 頁。

44) 「法の精神」(上) 388 頁。



多く有たぬ。一に對して自然は多くを與へた。そこでそれらの國民は自然に對して少ししか要求せぬ。他に對して自然は少ししか與へぬ。そこでそれらの國民は自然に對して多くを要求する。自然が南方國民に附與したところの怠惰と北方國民に附與した勤勉と活動とによつて平均が維持される。」

「世界は時々商業を變更する状態の中に置かれる。現今ヨオロッパの商業は主として北から南へ爲されてゐる。この場合氣候が相異なる結果として諸人民は相互に商品を大いに欲求する。」

「我らの知る古代の商業は地中海の一つの港から他の港に對して行はれたものであつて、殆んど全く南方で行はれた。然るに同じ氣候の下に於ける人民は殆んど各々同じ物を有つてゐるから、相異なる氣候の下に於ける人民はど互に通商を爲す必要を有たぬ。従つてヨオロッパに於ける商業は、昔は現今に於ける程廣く行はれてゐなかつた。」<sup>45)</sup>

商業が種々なる文化に及ぼす影響を明かにする目的を以つて、彼は新大陸の發見に伴ふ結果をも考慮の中に加へて、商業史の十分なる研究がなされてゐるのである。

#### B、人 口

モンテスキューが人口増加と自然環境との關係を明確に示した「法の精神」第二十三篇の論述は、近代社會科學者のそれにも餘り多くを見出し得ない。

「動物の女性はやんど恒常的な繁殖力を有つ。併し、人類に於ては、考へ方、性格、情欲、氣紛れ、出來心、そ

45) 「法の精神」(下) 44—6 頁。

の美を保持する考へ、妊娠の厄介、あまり多數な家庭の厄介が無數の方法で増殖を妨げる。』<sup>46)</sup>

「二人の人間が安易に生活し得る場所が見出されるに至るところに於て、婚姻が爲される。自然は生存の困難によつて阻止されぬ限り、かなり婚姻に傾く。

「新興人民は甚だしく増殖する。獨身生活は彼らに於ては大なる不便であらうが、多くの子を有つことは不便ではない。國家が形成されるとその反對が生ずる。』<sup>47)</sup>

「牧畜地方は人が少い、なぜなら、そこでは少しの人しか職を見出し得ぬから。小麦の産地はより多くの人間を使ふ。葡萄産地はそれよりもずつと多くの人を使ふ。

「英國では、しばしば、牧場の増大が住民を減らすとの不平があつた。而してフランスでは、葡萄産地の多いことがその人口の多いことの大原因の一だと云はれる。』<sup>48)</sup>

「市民の數に關する規則は多くの事情に依倚する。自然がすべてを爲した地方もある。従つてそこでは立法者は爲すべき何事をも有たぬ。氣候〔風土〕の繁殖力が十分の人を與へる場合、法によつて繁殖を獎勵する必要があるか。時には氣候が土地より恩惠的である。そこでは人民は殖え、而して饑饉がこれを亡ぼす。支那の場合はこれだ。』<sup>49)</sup>

これに依れば人類は生活資料の豊富などころでは、他の抑制事情なき限り増殖することは自然の成行であつて、それに善良なる政治組織の國にあつては、更にその増殖を助けるものなるこ

46) 「法の精神」(下) 132 頁。

47) 「法の精神」(下) 138 頁。

48) 「法の精神」(下) 140 頁。

49) 「法の精神」(下) 141 頁。

とを、モンテスキューは「ベルシャ人の手紙」の中でも觸れてゐる。<sup>50)</sup>

人口減退を來す原因は實に無數で、戰爭、流行病、飢饉ある種の自然環境、宗教迷信、勞働の嫌惡、虛弱、不義の性交、キリスト教國に於ける離婚禁制、去勢的獨身生活、長子相續法、惡政、專制政治等をあけてゐるのであるが、マルサスに先き立つ一世紀前にこの所論を見るのは興味ある點であらう。この人口減退の傾向を阻止せんとして、各國民は結婚と人口増殖とを獎勵する爲め各種の法を制定してゐる。モンテスキューは、その例として、この目的の爲めに古代ローマ人が採用した種々な方法を示し、且つ又現代フランスに於けるそれをも説明してゐる。

## VII、自然環境論批評

以上に於いて、我々は「法の精神」にあらはれたモンテスキューの自然環境と人類社會との關係を、彼の言葉を借りて、可成り詳細に紹介したつもりであるが、この自然環境が我々の社會生活の內的並びに外的兩方面に著しい影響を與へることを、かくの如くに詳しく、且つ明かに述べた者は彼を以つて始めとしなければならぬであらう。無論彼以前に於いて、この自然環境を重視したものはあつた。例へば、アリストテレス及びボーダンの如きを舉げることが出来るが、その範圍の廣く、材料の豊さは遙かにモンテスキューに及ばない。

然しながら、この點に對する非難攻撃ももとより尠しとはしない。我々は彼の自然環境論の

50) Lettres persanes, Bibliothèque Larousse. CXXII. p. 198.

みを考へれば Fernand Faure が云ひし如くに「現代社會學は氣候の影響に關するモンテスキューの觀察に何物も加ふる處なしと云ひ得る」<sup>51)</sup>ことを承認しなければならぬ程「法の精神」に於いては説明して餘すところがない。ただこれのみであつては、人文地理學への貢獻が主であるとしなければならぬ。而して又、ボーダンのそれを相距ること大でないとしなければならぬ。人類社會が第一義的に自然環境に依つてのみ支配せらるると見るは餘りに狭き一方的の解釋でなければならぬ。果して彼は、人類社會に對する自然環境の影響を重視し、社會環境の影響を無視してゐるのであらうか。

「法の精神」に於いて、この社會環境を論ぜるかに思はしめる部分は、第十九篇に、法と一般精神慣習生活様式との關係を論ずる場合のところである。

「多數の事物が人間を支配する。氣候、宗教、法、政體の格律、過去の事物の例、習俗、生活様式。そこから、その結果たる一般精神が形成される。

「各國民に於て、これらの原因の一がより強く活動するに従つて、その他の原因はそれだけに讓歩する。自然と氣候が殆んど獨裁的に未開民族を支配する。生活様式が支那人を統治する。法が日本に暴虐を加へる。習俗がかつてスバルタで支配し、政體の格律と古代の習俗がロオマで支配した。」<sup>52)</sup>

この記述に依れば、未開民族は強大な自然的環境に支配され、文明民族は社會的環境の影響を

51) Fernand Faure, dans le Nouveau Dictionnaire d'Economie politique, p. 331. Note, 2. 竹内謙二、モンテスキュー研究（社會科學所蔵）44頁參照。  
52) 「法の精神」（上）413頁。

力強く受けたと解釋することが出来る。然し、この引用文を除いては、常に社會への影響の根本には自然的環境が強く根をおろしてゐる様に我々には思はれる。

然るにモンテスキューの遺稿未公刊の論集 (*Mélanges inédits de Montesquieu*, 1892) の中に發表された一論文「精神及び性格に影響を與へる諸原因に就いて」 (*Essai sur les causes qui peuvent affecter les esprits et les caractères*) の中に、次の如き叙述がある。

「道德的原因是物理的原因に比して、一國民の一般特性をより多く形づくり、その精神の性質をより多く決定する。<sup>53)</sup>

この論文は自然的環境と道德的環境とが、如何に人間の氣風、意志、行動を規定するかを説いたものであつて、これに依つて見れば、彼は道德的環境——社會環境——を重要視しておつたと解釋され得るのであつて、自然環境論は從屬的立場に立つと見なければならぬ。

然らば、何故に、彼が「法の精神」に於いて自然環境論に對して多くの頁を割いて論述したのであらうか。我々は、たゞ／＼モンテスキューが、その青年時代に於いて自然科學的研究に興味を持つてゐたことを思ひ合すならば、自然環境の影響を必要以上に強調してゐるのではあるまいか。更に、社會的影響を説くことはとかく、主觀的叙述になり易き爲め——既述の如く、自然環境を論ずるに當つて、既にこの誤ちに陥ち入つてゐるのではあるが——彼の科學研究法が自然環境

53) *Mélanges inédits de Montesquieu*, publiés par le baron de Montesquieu, 1892, p. 141. 尙、田邊壽利、フランス社會學史研究、119 頁參照。

を論ずるに最も相應しきものであつたと思はしめたからであらう。

而して、彼が「法の精神」に於いて述べてゐるところは今迄に讀了し觀察して得た極めて該博な知識を全部示さなければならぬかの如く思はしめる。それ故に、秩序的であるよりも、むしろ斷片的で、幾多の重要な事實の集積を示すのみで、これが展開に意を配らない。句は切れ切れで、章の内容も短かく、細かに分けられてゐるので、事の重要性に従つてその説くところ自ら長短があると思はれないやうである。

かく考へれば以上の疑問に對する解釋の多少の暗示ともなり得るであらう。

## 五、結 語

「今日ではモンテスキューは歴史的方法の建設者と見做さるべきであるとはきまり文句である。」<sup>54)</sup>と「Laski」が云つてゐるのは、誠によく云ひ現はしたものである。モンテスキューが従前の歴史家の非科學的研究態度を脱して、幾多の事實を集積し、經驗を豊富にし、これ等の特定の事實より、社會の進化が一定の論理の下に展開されて行く法則を引き出さんと考へた點に、彼の偉大な點がある。

又彼は法律の精神と此の法律を有する國民の精神との間の關係を規定しようとした。ある

54) Laski, Political Thought in England from Locke to Bentham, 1919. p. 126.

國民の政治組織が、その國民全體の性質従つてその道德的、宗教的及びその他の見方と關係があると云ふこと、及び關係がなければならぬと云ふこと、それ故に法律の精神が國民の精神に根ざしてゐるといふこと、これを示さんとしたのである。然し、この國民の精神なるものは、またその國民の住する領土の歴史的發達及び地理的状況の所産として理解されなければならない。その場合に、モンテスキューが好んで述べたところの題目は、特に氣候と土地との影響であつた。

彼が政體の分類をなしたことも、それは社會心理學の見方からの考察で、各政體に關して彼はその特色をなせる心理學的基礎を示し、そしてその心理的基礎よりして個々の政體が如何なる國家制度に適するか、如何なる事情の下に個々の政體は維持され、又は没落するかを説かんと努めたので、これはとりもなほさず社會形態論の部分に屬しての社會學的取扱ひ方であつた。

彼の業績を評價するに當つて、諸家の言を借りて以つてこの結びとしたい。

我々は先づ Dunning の言に聽かう。

「法の精神」に依つて扱はれた範圍は非常に廣汎で政治學そのもの、著述とするよりも寧ろ社會科學のそれとする方が適當である。モンテスキューの研究の方面は、社會に存在せるすべての制度を了解せるギリシャの哲學者のそれである。彼の一般的精神は、アリストテレスの「政治學」を強く暗示せるにも拘はらず、彼の見解は、屢々明かにプラトンの見解を示してゐる。彼は古代に於いて正に普通の意味に於ける立法者の地位に我が身を置いて

た。即ち、一定の社會を規制する爲めに法典を造ることを委任されたソロンやリクルグスの如き、殆んど超人的聰明さを持つ人の地位に我が身を置いた。かゝる立法者が取扱つた問題は特にモンテスキューに興味があつた問題である。然しながらこれ等の問題解決に當つて、彼の方法はアリストテレスのそれで、プラトンのそれではなく、ボーダンのそれで、ホッブスのそれではなく、ロックのそれである。彼の時代のすべての思想家の如くに、彼は彼の法則の規準を自然に求めた。然し、自然の説は純理の抽象的假定からの演繹に求めずして、現在並びに過去の生活の具體的事實に求めた。社會現象及び社會現象を支配する法則に關する彼の説明は主として歴史並びに觀察から得たもので、かくして得た説明は、彼の哲學に於いて、何等かの立法の道德的或は政治的價值に關して判定をなすに當つての主要素である。」<sup>55)</sup>

Ciddings は社會學史上に於ける彼の地位を次の如く彼を論評してゐる。

「プラトンからロックに至るまでとり來つたこの長き發展を通じて、また、その多様な相に於いて、社會理論は、觀察を等閑にせず、外的原因を無視しなかつたけれども、すべて思辨的であつて、或は Karl Pearson の言葉を用ふれば、「觀念的」であり、その解釋は主として、動機及び理性のやうな主觀的原因を意味する言葉であつた。然し、科學はビヤソンの主張する如く、觀念的始めから、その進化の第二の段階に於いて觀察的となり、而して遂には、第三の段階に於いては數的或は量的で、言葉の嚴密なる意味に於いて歸納的となる。

「モンテスキューの「法の精神」に於いて社會哲學者の思辨的方法是明かに棄てられた。この著述は記述的であり

55) Political Theories, Luther to Montesquieu, pp. 394-5.



その結論は、具體的事實の正確性と十分なることに依つて——その結論たるや具體的事實を普遍化して得られたものである——立證せられ、或は棄てられる。この著述は現代の標準より判斷するならば、初步的であり、素朴ではあるが、それをなせる功績、即ち歸納的方法に注意を向けしめ、社會現象の經緯に客觀的解釋への關心を喚起し、暗示と實例とを以つて、今日、多くの人種學的並びに其他の記述的社會學的材料を、學者の利用の爲めに蒐集せる多くの探究に刺戟となつたことを認めることを妨げるものではない。モンテスキューは社會哲學を記述的社會科學たらしめたのである。<sup>56)</sup>

コムトも亦次の如く評論してゐる。

「この記憶さるべき著述の偉力あることは、政治的現象をもつて、その他餘の現象と等しく一定の法則に従ふものと見做す點にある。これは序言の、最初に述べられてゐるところで、その中で人類史に於いて始めて、法則の一般的概念が最も單純なる實證的調査に於いて、與へ來つたと同じ意味に於いて、すべてのものに關して、政治的なるものにさへも、定義されるに至つた。一世紀前に、Descartes, Galileo, Kepler の勞作に於いて成し遂げられた科學の進歩が、進歩に對する不十分なる考へ方に慣されてゐる秀ぐれた人々に貢獻するところがあつた。モンテスキューの觀念はこの不十分なる考へ方を普遍化することであつた。而して又、その獨創性を否定せずして實證の方法が最も單純な自然現象以上に及ばなかつた時代に於いて——即ち化學の分野にも殆んど入らず、未だ生物身體の研究に就きて聞かなくなつた——かゝる概念を提出するに至つた貢獻の如何に勝れてゐたかは正に

56) Franklin H. Giddings, *Studies in the Theory of Human Society*, 1922 pp. 107-8.

驚くべきことである。而して、他の見地に立つて、社會狀態を任意に變改するに至當なる權威を以つて武裝してゐる時にすべての他の有力な人々が立法者の絶對的無限の力に就いて語つてゐる間に、社會的思辨と行動との基礎として自然法を考へ得た人は、その時代から先んじてゐるに違ない。」<sup>57)</sup>

Lichtenberger も亦次の如く云ふ。

「社會的行動を人間の環境に對する反作用と云ふ言葉で説明することは Darwin, Spencer から Ciddings 及び近代の生理學的・心理學者に至る迄の社會の進化的説明の基礎を構成すると云ふことを注意しなければならない。然しながら、この結論が完成せられる前に、この原理の論證がなされ、人間の理想と制度と自然的環境との間に於ける因果關係が樹立せられることが必要であつた。これが法の精神に於けるモンテスキューの仕事であつて、既にボーダンに依つて早熟で、不完全ながら始められた仕事であつた。」<sup>58)</sup>

更に、イギリス人ハラム(Hallam)はモンテスキューとボーダンを比較して次の如く云ふ。

「モンテスキューは何等かの點に於いて、特に、氣候影響論に於いてボーダンに負ふと屢々云はれてゐる。然しこの最も秀いでた考を持つた人が、「國家論」(La Republique)を読んだことは疑ひなく、利益をこれから得たとしても、これは我々の眼から見れば彼の眞の獨創性を減すべきではない。然しながら「國家論」と「法の精神」とは他の如何なる有名なる政治上の體系と較べても、非常に相比敵してゐる。ボーダンとモンテスキューとは政治理論の分野に於いて、非常に深い造詣を持つた最も哲學的な人々であり、多くを考へるところあつた最も有力な學者

57) Positive Philosophy, tr. by Martineau, pp. 442-4.

58) Lichtenberger, Development of Social Theory, pp. 212-3.

である。兩者共、考へ方に於いては鋭敏にして巧みで權威に屈せず、既成勢力に於いては譲るところがあり、従つて、その苦味を以つて現はされた水の根源を賞讃し勝ちである。共に、彼の時代に先きんじてはるたが、前者は、その天才が一般民衆に熱情を起させる程のこともなく、或は、それに相應しき賞讃も得なかつたが、後者は彼が鼓舞し、その賞讃に依つて彼に報ひたところの、直接の、時代の先驅であつたことに於いて幸運であつた。

兩者共に、古代史、中世史に精通し、ローマ法並びに自然法に精通してゐる。集團社會の偉大な目的に就いては共に正しく、慈善的で敏感であるが、これを、彼等の時代に従つて多少の相違を示してゐる。兩者共に、時としては誤れる類推に依つて迷はされたが、前者はむしろ誤謬の哲學を尊重することに依つてであり、後者は私的な賞讃の渴望と獨創性の感情に依つてゐた。兩者は、人間の哲學の基礎は過去の存在の記録に置かるべきであることに氣付いたが、前者はやゝもすれば十分なる辨別をせずして歴史的事例を集め、讀者を悟らしめる代りにそれ等の重複に依つて讀者を壓倒し勝ちであり、後者は選ばれた經驗から歸納することを目指すが、従つて、時としては特殊な前提から一般的に推論してゐたり、或は彼の推論を満足させない證明に依つて研究者を迷はしめてゐる。<sup>59)</sup>

田邊壽利氏は「十八世紀フランス社會學」なる論文の中にモンテスキューの社會學的思想を要領よく概括してゐられるからそれを引用することに依つてこの小論を閉ぢたい。

「宇宙間の萬物は、すべて自己自身の法則に従ふ。人間は獨自的存在であり、而して人間の結合體たる社會ま

た獨目的性質をもつ。この社會を動かす原因は、社會自身のうちには存しない。社會の原因には二種ある。自然的環境及び道德的環境がそれである。この二種の原因のうち、後者はより優勢である。この二環境によつて、社會はそれ自體の意識すなはち一般精神をもつ。一般精神の相違は、社會に類型を生ずる。したがつて、政治に於いては、この一般精神及びその要素に着目しなければならぬ。我々は、「ヘルシャ人の手紙」より「法の精神」にまで發展したモンテスキューの思想を、大體以上のごとく見ようとするのである。而してもしかくのごとく見られ得るとすれば、モンテスキューは、コムトのいへるごとく、またデュルムのいへるごとく、フランス社會學の出發點をなすものである。」<sup>60</sup>

文 献

- Comte, Auguste, *Positive Philosophy*, translated by Martineau, Blanchard, New York, 1855.  
 Condorcet, M. A. *Commentary and Review of Montesquieu's Spirit of Laws*, Duane, Philadelphia, 1811.  
 Croce, Benedetto, *The Philosophy of Giambattista Vico*, translated by Collingwood, Macmillan, New York, 1913.  
 Dunning, Wm. A., *Political Theories*, Luther to Montesquieu, Macmillan, New York, 1918.  
 Giddings, F. H., *Studies in The Theory of Human Society*, Macmillan, New York, 1922.  
 Halam, Henry, *Introduction to the Literature of Europe*, Murray, London, 1872.  
 Lichtenberger, James, *Development of Social Theory*, Century, New York, 1925.  
 Montesquieu, Charles Louis, Baron de, *The Spirit of Laws*, translated by Nugent, New Edition ed. by Prichard, Geo. Bell & Sons, London, 1894.

- Montesquieu, Charles Louis, Baron de, *Persian and Chinese Letters*, translated by Davidson, Dunn, London 1901.
- Murray, R. H. *The History of Political Science, from Plato to The Present*, Hefter & Sons, London, 1926.
- Pearson, Karl, *The Grammar of Science*, Black, London, 1900.
- Sorel, Albert, Montesquieu, translated by Gustave Masson, George Routledge & Sons, London, 1887.
- Stein, Ludwig, *Die Soziale Frage im Lichte der Philosophie*, Ferdinand Enke Stuttgart, 1923.
- Sternberg, Kurt, *Die Politischen Theorien in ihrer geschichtlichen Entwicklung vom Altertum bis zur Gegenwart*. Seeman, Berlin, 1922.
- Vorländer, Karl, *Von Machiavelli bis Lenin*, Quelle & Meyer, Leipzig, 1926.
- Williams, David, *Lectures on Political Principles*, Bell, London, 1789.
- 箕作 元八 第十八世紀佛蘭西文化史。
- 今中 次麿 政治思想史、上卷。
- 田邊 壽利 フランス社會學史研究。
- 加田 哲二 近世社會學成立史。
- 同 近代唯物的社會觀の發展。
- 宮澤俊義 法の精神、上、下。
- 木村 幹譯 法の精神(世界大思想全集<sup>5</sup>)。
- 宮澤 俊義 モンテスキュー(岩波講座、世界思潮第十一冊)。
- 竹内 謙二 モンテスキュー研究(社會科學第二卷第三號)。